

詩經國風 下

吉川幸次郎注

編集・校閲
吉川幸次郎
小川環樹

中國詩人選集 2

昭和三十三年十二月二十日 第一刷発行 ©

定価二二〇円

注 者 吉 川 幸 次 郎

発行者 岩 波 雄 二 郎

印刷者 山 田 一 雄

発行所

東京都千代田区
神田一ツ橋三ノ三 株式会社

岩 波 書 店

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

王 風 王のくにの歌……………七

黍離	きびはうなだれて……………	九
君子于役	せのきみはたびに……………	四
君子陽陽	せのきみはたのしげに……………	六
揚之水	たばしるみず……………	八
中谷有蓷	たにそのめはじき……………	二
兔爰	うさぎはのびのび……………	四
葛藟	くずときづた……………	七
采芣	くずをつむひと……………	三〇
大車	ぶぎょうのくるま……………	三
丘中有麻	おかのおさばたけ……………	四

鄭 風 鄭のくにの歌……………三七

緇衣	くろもんつき……………	四〇
將仲子	じろうさんおねがい……………	四二
叔于田	さぶろうのまきがり……………	四四
大叔于田	もひとつさぶろうのまきがり……………	四八
清人	せいのおとこ……………	五三
羔裘	こひつじのうわぎ……………	五五
遵大路	おうらいのまんなかで……………	五八
女曰鷄鳴	あなたとりがなきましたよ……………	六〇
有女同車	あいのりのおんなのこ……………	六三
山有扶蘇	やまにはふそ……………	六五

蘼兮 かれはよ…………… 七

狡童 いろおとこ…………… 六

褰裳 もすそをからげて…………… 七

丰 かつぶく…………… 七

東門之墀 ひがしものひろば…………… 六

風雨 あらし…………… 六

子衿 あなたのえり…………… 六

揚之水 たばしるみず…………… 八

出其東門 ひがしものそとでは…………… 八

野有蔓草 のにはのびたくさが…………… 八

溱洧 かわむこうのひろば…………… 八

齊 風 齊のくにの歌…………… 九

鷄鳴 とりのそらね…………… 九

還 すばやさ…………… 九

著 げんかんさき…………… 九

東方之日 ひがしなるひ…………… 一〇

東方未明 よあけまえ…………… 一〇

南山 みなみのやま…………… 一〇

甫田 ひろいたんぼ…………… 一〇

盧令 いぬのすず…………… 一〇

敝笱 ぼろのびく…………… 一一

載駟 さあさあばしやを…………… 一四

猗嗟 ああ…………… 一七

魏 風 魏のくにの歌…………… 二一

葛屨 くずのくつ…………… 二三

汾沮洳 ふんのぬかるみ…………… 二五

園有桃 はたけのもも…………… 二六

陟岵 はげやまにのぼって…………… 二三

十畝之間 せまいはたけ……………一三五

伐檀 きこり……………一三六

碩鼠 でかいねずみ……………一四二

唐 風 唐のくにの歌……………一四五

蟋蟀 きりぎりす……………一四八

山有枢 やまのあきにれ……………一五二

揚之水 たばしるみず……………一五五

椒聊 さんしょう……………一五九

綢繆 がんじがらめ……………一六〇

杕杜 いっぽんなし……………一六三

羔裘 こひつじのうわぎ……………一六五

鷦羽 のがんのはね……………一六七

無衣 きものがないとは……………一七〇

有杕之杜 なしのきが いっぽん……………一七二

葛生 くずはおいしげり……………一七三

采芩 あまくさつみ……………一七七

秦 風 秦のくにの歌……………一八一

車鄰 くるまはからり……………一八三

駟驥 しひきのくろうま……………一八六

小戎 こがたのせんしゃ……………一八八

蒹葭 よしとあし……………一九四

終南 しゅうなんざん……………一九七

黃鳥 うぐいす……………一九九

晨風 たか……………二〇四

無衣 きものがないとは……………二〇七

渭陽 いのかわのきた……………二〇九

權輿 はじめはね……………二一一

陳 風 陳のくにの歌……………二二三

宛丘 えんのおか……………二二五

東門之粉 ひがしもののにれ……………二二七

衡門 かぶきもん……………二二〇

東門之池 ひがしものいけ……………二三三

東門之楊 ひがしものやなぎ……………二三四

墓門 はかばのもん……………二三五

防有鵲巢 つつみにはかささぎのすが……………二三七

月出 つきので……………二二九

株林 ちゅのもり……………二三二

沢陂 めまのつつみ……………二三三

檜 風 檜のくにの歌……………二三七

羔裘 こひつじのうわぎ……………二三八

素冠 しろいかんむり……………二四二

隰有萋楚 さわにはちようそ……………二四三

匪風 おかしなかせ……………二四五

曹 風 曹のくにの歌……………二四九

蜉蝣 かげろう……………二五〇

候人 せきもり……………二五二

鵲鳩 きじばと……………二五六

下泉 ながれゆくいずみ……………二五九

豳 風 豳のくにの歌……………二六三

七月 ふみづき……………二六五

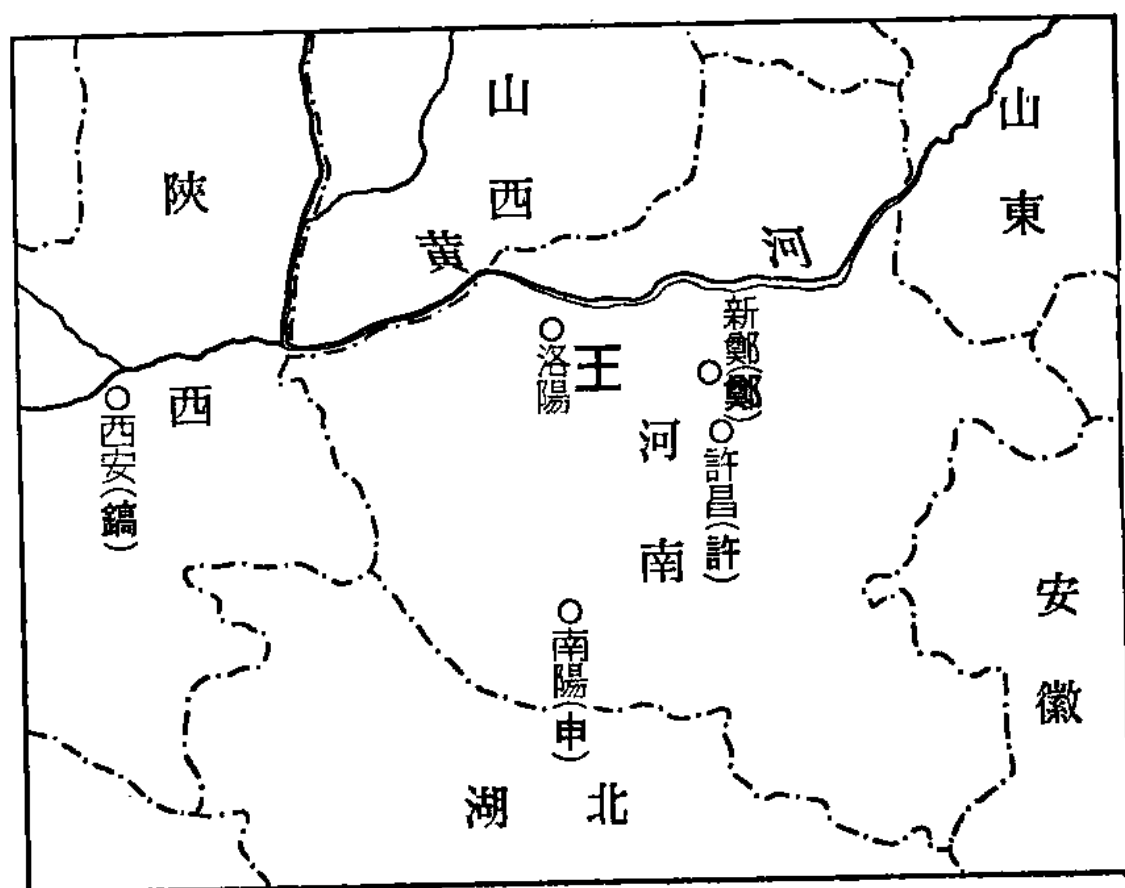
鴝鵒 よたか……………二七八

東山 あずまのやま……………二八二

破斧 まさかりのひび……………二八九

伐柯	えをきるには……………	二九二
九罏	こあみ……………	二九三
狼跋	おおかみのあしどり……………	二九六
あとがき	……………	二九
年表		

卷の六王風



卷の六

王風

王のくにのうた 十篇

前八世紀初、周の王室が西方の異民族の圧迫をさけ、都を陝西省の鎬京から河南省の洛陽へ遷したばかりのころ、そのわずかな勢力範囲となった新都洛陽の周辺地帯の歌。つまり東周初期の河南省中部の歌。周王室東遷の経過をややくわしく述べれば、周のさいしょの都が、陝西省西安附近の鎬にあったことは、周南召南の解説（上冊二六ページ）で説いたごとくであり、創業の英雄武王姫癸以来三百何年間、ずっと都はそこにあった。いわゆる西周の時代である。ところがその末年には、国勢がおとろえ、厲王姫胡の暴政ののち、宣王姫靖によって一度は復興したけれども、さいごの幽王姫宮涅に至って破局に到達したことは、のちの「小雅」「大雅」の諸篇が、その記録としてある。女色にふける幽王は、異民族の大戎に殺され、国都の鎬も陥落したので、その子の平王姫宜臼が、諸侯の援助を得て、都を東のかた洛陽にうつしたのは、BC七七〇年であり、以後の東周の時代のはじめとなる。もともと洛陽は、王朝創業者の一人周公姫旦が、早くからひかえの都として経営しておいたところであり、避難地として好適であったのである。

ところでこの巻に収める十篇の詩は、漢の鄭玄の「詩譜」によれば、東遷第一代の平王、その子桓王、

そのまご^{そご}莊王の時代のものといい、晋の皇甫謐の「帝王世紀」の説もおなじい。

I 文王 — II 武王 — …… XI 厲王 — XII 宣王 — XIII 幽王 — XIV 平王^{770—720} — 宜臼⁷²⁰ — XV 桓王^{719—697} — 林⁶⁹⁷ — XVI 莊王^{696—682} — 僖⁶⁸²

これらの歌が、王室にちなむ歌でありながら、西周時代のそれらのように「雅」とはもはや呼ばれず、諸大名の歌なみに、国風の一つとして「王風」と呼ばれるのは、周の王室の権威と機能が低下して、もはや政治的文化的影響を中国全体に及ぼすことができず、諸大名なみに小さな地域だけを統治することになったからというのが、普通の説である。

春秋左氏伝の襄公二十九年、BC五五四年の条に、呉の公子季札の「王風」に対する批評として記すものは、

——美しい哉、思うて懼れず。其れ周の東せるもの乎。

黍離^{しより} きびはうなだれて 三章

○右にのべたように、周の王室が東方の洛陽へ遷都したばかりのころ、ひとりの重臣が、もとの王都である陝西^{せんせい}の鎬京^{こうけい}へ旅行し、それがすっかりきび畑となりはてているのをかなしんだ歌。

彼黍離離^{かきびりり} 彼しこの黍は離離たり

彼稷之苗^{かきびのこなえ} 彼しこの稷は之れ苗せり

行邁靡靡

行を邁くこと靡靡として

中心搖搖

心の中は揺揺たり

知我者

我れを知る者は

謂我心憂

我れは心憂うと謂い

不知我者

我れを知らざる者は

謂我何求

我れは何をか求むるやと謂う

悠悠蒼天

悠悠たる蒼天

此何人哉

此れは何人ぞや

あすこにきびは垂れさがり、あすこに小きびは苗をだす。道をとぼとぼとあゆめば、むねのうちはふらふらする。わたしの氣もちを知るひとは、わたしの胸のなやみを知る。わたしの氣もちを知らぬひとは、わたしは何をものほしげにきよきよろしているかという。はるかなる青空のあまつ神よ、へふるい都をこんな廢墟にした君主、それは何という人間です。

○彼もと宮殿のあったところを彼しことさしたと、漢の毛氏の注すなわち毛伝がするのによつて訳す。いわく「彼しことは宗廟宮室を彼しことす」。○黍江村如圭「モチキビ」。清の程瑤田は今の黄米という。○離離擬態語。朱子「垂るる貌」。○稷江村如圭「俗名コキビ又名ウルキビ」。小野蘭山はただ「キビ」。程瑤田は今の高粱とする。○行邁毛伝「邁は行く也」。また鄭箋すなわち漢の鄭玄の補注に「行は道也」。しからば「行邁」とはけっきよく「道行」であり、普通の語序にすれば「行道」である。○靡靡擬態語。毛伝「遲遲といわんが猶し」。

○中心 心中というのの古いい方。つぎの中谷有菴(二一ページ)の中谷が谷中であるのと同じいい方。○揺 擬態語。毛伝に「深く愁いて訴うる所無き也」。○謂我心憂 謂我何求 謂の字は何らかの評価判断をふくんで発言する際のいうである。○悠悠 擬態語。毛伝に「遠き意也」。物理的に遠いのであると共に、後世のこの二字の用例のように、こちらの心理から遠くして非情であるという意味をも、おそらくは含む。○蒼天 至高の神格をもち人間の監督者である天に対してはいろいろの呼び方があるが、うち「蒼天」とは、「遠きに拠りて之を視れば蒼蒼然たる」点からの呼び方であると毛伝の説。○此何人哉 都を廢墟としたのはもとより幽王姫宮淫であることを知りつつ、天にむかってわざと問うたのである。○韻脚はa 離・靡b 苗・揺c 憂・求d 天・人。

彼黍離離
彼稷之穗
行邁靡靡
中心如醉
知我者
謂我心憂
不知我者
謂我何求
悠悠蒼天

彼しこの黍は離離たり
彼しこの稷は之れ穂あり
行を邁くこと靡靡として
心の中は酔えるが如し
我れを知る者は
我れを心憂うと謂い
我れを知らざる者は
我れは何をか求むるやと謂う
悠悠たる蒼天

此何人哉

此これは何人なんびとぞや

あすこにきびは垂れさがり、あすこに小きびは穂をたれる。道をとぼとぼとあゆめば、胸のうちは酒に酔ったよう。わたしの気もちを察するひとは、わたしのむねのなやみを知る。わたしの気もちを察しない人は、わたしは何をきよろきよろしてるといふ。はるかなる天つ神、それは何という人間です。

○彼稷之穗 毛伝に「穂は秀也」。穂をだす。ところで稷の方は、前章では苗を出した、この章では穂を出した、次章では実ったと、だんだん生長しているのに対し、黍の方はいつも離離である。黍の方ははじめここへついた時の状態でいつづけ、稷の方は月をかさねる滞留の間に目にふれた変化をいうとするのが、毛伝の説だとされる。「黍の離離たる自り、稷の穂を見る。故に其の見るを更し所を歴え言う也」。○酔 毛伝「憂いに酔う也」。○韻脚はa離・靡b穂・酔c憂・求d天・人。

彼黍離離

彼かしこの黍きびは離離りりたり

彼稷之實

彼かしこの稷こきびは之これ実みのれり

行邁靡靡

行みちを邁ゆくこと靡靡ひひとして

中心如噎

心こころの中は噎むせぶが如ごとし

知我者

我われをし知る者ものは

謂我心憂

我われを心こころ憂うれうと謂いい

不知我者

我れを知らざる者は

謂我何求

我れは何をか求むるやと謂う

悠悠蒼天

悠悠たる蒼天

此何人哉

此れは何人ぞや

あすこにきびは垂れさがり、あすこに小きびはみのる。道をとぼとぼとあゆめば、胸のうちは息がつまりそう。わたしの気もちを察する人は、わたしの胸のなやみを知る。わたしの気もちを察しない人は、わたしは何をきよきよろしてるといふ。はるかなる天つ神よ、それは何という人間です。

○噎 のどがつまる。むせぶ。毛伝に「憂いて息する能わざる也」。○彼稷之実 毛伝は前に説いたような意味で「黍の離離たりし自り、稷の実るまでを見る」。○韻脚はa離・靡b実・噎c憂・求d天・人。○ところでこの歌、以上といて来たように、西周の亡国をいたんだとするのが、漢人の古注である毛伝と鄭箋、また宋の朱子の「詩集伝」をはじめ、古今の通説である。そうして今一つの同種の歌である麦秀のうた、すなわちこの歌の時期をさかのぼること更に三百何年か、殷の亡国ののちに、その遺臣箕子が、やはり廢墟となった殷の国都のあとをすぎて、亡国の君紂をとがめ、「麦は秀でて漸漸たり。禾と黍とは油油たり。彼の狡しき童は、我れと好からざりき」と歌ったと、「史記」の宋微子世家篇に見えるものと、往往にして並称される。ただし漢時代には、全く別の解釈もあった。韓詩学派では、西周の宣王の大臣であった尹吉甫が、後妻の中傷によって、長男伯奇を殺したのを、伯奇の弟伯封がうらんで作った歌としたらしく（太平御覽その他）、また劉向の「新序」では、上冊一六六ページで説いた衛の国のお家騒動にからむ歌とし、衛の宣公の太子の伋が、非業の死にたおれたのを、弟の寿がいたんだ歌とする。いずれも通説とは大へんちがった解釈であるが、くわしいことは分らない。

君子くんし于役うえき

せのきみはたびに 二章

○夫の留守をまもる妻の歌と、朱子がするのによる。毛伝鄭箋など漢人の古注は、旅にいる同僚を思う官僚の歌とするが、いまそれに従わない。また古注はこれも平王の時代の歌とする。

君子于役

君子くんしは役つとめにゆきて

不知其期

其その期ときを知らず

曷至哉

曷いつか至いたらん哉や

雞棲于埘

鶏にわとりは埘ねぐらに棲やどり

日之夕矣

日ひの夕ゆうべなるまに

羊牛下來

羊ひつじと牛うしは下くだり来きたる

君子于役

君子くんしは役つとめにゆく

如之何勿思

之これを如何いかんぞ思おもう勿なけん

せのきみはお役目の旅、お帰りの時期はわからない。いつになったら帰ってらっしゃる。にわとりはねぐらにねむり、日もくれれば、羊も牛も山からおりて来る。それにせのきみはお役目の旅、どうしてしなばずにいられよう。

○君子くんし 朱子により夫をさす言葉とする。せのきみ。古注では、中央にいる官吏が旅にいる同僚を呼ぶ言葉。○